

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

お香はどこから来てどこへ行くのか

金沢謙太郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系教授)

マレーシアの首都クアラルンプールにお香の専門店が目立ち始めたのは 2000 年に入ってからだろうか。ショッピングモールやスーパー、ホテルのロビー、雑居ビル、露店と至る所で目にする。店先の香炉から立ち上る香りで気づくこともある。店内のショーケースに並ぶのは各種の香水のほか、東南アジア産の香木だ。メインの商品はマレー語でガハル (gaharu) あるいは英語でアガーウッド (agarwood) と呼ばれる沈香である。

沈香とは熱帯雨林に生育するジンチョウゲ科ジンコウ属の樹木の樹脂で、加熱すると独特の芳香を発する。仏教やイスラム教、ヒンズー教などの宗教儀式的焚(ふん)香料として使用されてきた。中国では、紀元前 1 世紀ごろから使用された記録があり、動悸(どうき)や息切れなどへの薬用の効果も認められている。日本では、沈香を鑑賞する作法が整えられ、室町時代に香道が確立している。

沈香の値段は品質によりさまざまだが、上等なものは目が飛び出るほどだ。現在、クアラルンプールの専門店の顧客はもっぱらアラブ人ツーリストである。



サラワク州産の沈香 (筆者提供)

沈香に興味を持ったのは、サラワク州の狩猟採集民ブナン人の集落に住み込んで彼らの生活調査をしている時だった。沈香採りは数ある林産物の中で最も大きな収入源だった。知り合いに頼んで、沈香採りに同行した。何十匹ものヒルに噛まれてズボンの裾が真っ赤になって、ようやく 1 本見つけた。

ジンコウ属の樹木の生育密度は極めて低い。しかも、木があったとしても、沈香すなわち黒く樹脂化した部分ができている確率は 10 分の 1 もない。伐採や焼き畑

など人の手が入っていると、ほぼ見つけられない。ブナン人は樹脂の集積部だけを切り取って立木を残すという持続的な採集方法を行っていた。しかし最近、サラワク州の奥地の森にも外部から侵入者がやって来て沈香の立木が乱伐されている。

こうした中、沈香はワシントン条約による規制対象種に指定され、国際自然保護連合 (IUCN) のレッドリストに挙げられている。

沈香の国際取引について調べていた知人とシンガポールの問屋街を見て回ったことがある。シンガポールは沈香取引の一大中継地である。問屋の倉庫には東南アジアから集められた沈香がうずたかく積み上げられていた。ワシントン条約で求められている取引の書類は現場で確認できたが、各国当局や条約事務局の統計において沈香の産地や量が正確に把握されているわけではない。

マレーシア・プトラ大学のロジ教授の研究グループはジンコウ属の遺伝子配列の解析を通じて、地域個体群の検出を行っている。サンプル調査によって、マレー半島、東マレーシアのサバ州とサラワク州、カリマンタン (インドネシア) という産地の違いは明らかになっている。

ただ、現状では採集が禁止されている国立公園やブルネイの領土にまで侵入して採集してくる集団もいる。違法採集を防ぐためには、もう一段、詳しい産地情報や流通の履歴が求められる。

高級なものはとても手が届かないが、沈香の香りにはいつまでも癒やされたい。お香の文化は熱帯雨林の保全や採集者の生活保障ともつながっている。それを守るにはどういう知恵や方法があり得るのか、関係する人々と共に探っていきたい。マスクを外せる日を心待ちにしながら。

< 筆者紹介 >

1968 年長野県生まれ。マレーシア・サラワク州のブナン人のもとに通い、彼らの森林資源利用について調べる。近著に「環境社会学の視点からみる世界史 先住者の生活戦略から探る持続可能な社会」(岩波講座『世界歴史』第 1 巻 (2021 年 10 月刊行))。